

報告

特別支援教育における 学習支援ボランティア学生への学内支援体制について

山本真由美

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

要約：徳島市、徳島県の特別支援教育への支援事業の一環として大学生を学習支援ボランティアとして小学校や中学校に派遣する事業を開始して 8 年目を迎えていた。今まで学習支援ボランティア学生と派遣校との連絡体制の不十分さを両者が指摘している。両者の連絡の目的は、主に派遣校で支援を要する児童生徒への支援方法についてである。本学では、学習支援ボランティア学生の特別支援教育への支援に対する不安を軽減し、派遣校で適切に支援を行うことを目指して学習支援ボランティア学生への支援を定期的に実施している。本報告ではその成果を得るために質問紙調査を実施した結果と実施内容を報告する。

(キーワード：特別支援教育、学生ボランティア、学内支援体制)

Support system on campus for students at learning support volunteer in special needs education

Mayumi YAMAMOTO

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

Abstract : Eight years have passed since we started the project to dispatch learning support volunteer students to elementary and middle schools as part of its assistance to special education in Tokushima Prefecture and Tokushima city. Both learning support volunteer students and school teachers have pointed to the inadequacy of the liaison system until now. The purpose of the contact between both sides is primarily about how to help learning support volunteer students that require assistance when dispatched to both schools. In our university, we regularly conduct support to learning support volunteer students, and our aim is to reduce anxiety for assistance to special needs education to assist properly in school dispatch. In order to obtain the effect, we report the contents implemented and a questionnaire implementing the results was conducted.

(Key words: Special needs education, Learning support volunteers, Support system on campus)

1. はじめに

特別支援教育への支援事業の一環として、徳島市教育委員会や徳島県教育委員会と連携し、大学生と大学院生（以下、大学生）を学習支援ボランティアとして小学校や中学校に派遣する事業を開始して 8 年目を迎えていた。

この事業に対する評価は概ね肯定的であり、期待もある¹⁾が、派遣される大学生側と派遣校側のニーズ調査結果から課題が見出されている^{2,3)}。大学生からは学校現場において、「何をどこまでして良いのか分からぬ」や「教員との反省会や打ち合わせがないことが不安」等、ボランティアとしての役割や派遣校との連携に関する不安のあったことが浮き彫りになった。そして、派遣校教師からは「派遣されるボランティアの具体的な活用方法が分からなかった」や「派遣される大学生個々の特別支援教育や教育的な知識の習得度合い等、

ボランティア要員の個々の情報が欲しい」等の意見が得られた¹⁾。それらの課題を解決する一つの方法として、渡部・金山・武藤⁴⁾はコミュニケーション・カード（連絡記録表と同様の機能を担うもの）を使用することで、担任からのコメントが向上したと報告している。本派遣事業でも、徳島市教育委員会と協力して渡部・金山・武藤³⁾のコミュニケーション・カードを基にボランティア学生と派遣校教師との連絡を行う目的で連絡記録表を作成し、2009 年度から使用している。連絡記録表について調査した結果、その使用頻度は高かつたが、使用が役立ったと回答している大学生は少なかった²⁾。

徳島市教育委員会の場合、毎年 1~2 月に募集案内、登録記入カードが大学に送付されてくる。募集期間は 2 月 1 日から 3 月 31 日となっている。当該年度の反省会と次年度の説明会を兼ね、毎年 3

月にボランティア連絡会を徳島市教育委員会が開催している。その後、応募した大学生は、4月末に開催される説明会で派遣校が決定し、活動の実施に当たっての指導がある。そこでは全般的な説明はあるものの、それぞれの派遣校の説明はない。また、派遣校での指導は、派遣校により温度差がみられる。

そこで、本学で大学生がボランティア活動をしているのが少ない曜日・時間帯に検討会を実施した。本報告ではそれについて大学生の意識調査を実施したので、その結果を報告し、実際の検討会の内容を報告する。

2. 方法

2.1 調査協力者

2.1.1 学習支援ボランティア学生

本学大学生 14 名（男性 3 名、女性 11 名）であった。徳島市内の小学校 7 校、中学校 8 校（内、1 名は小学校と中学校の両方で活動）で活動を行った。

1) 質問紙調査に回答したのは 11 名（男性 3 名、女性 8 名）であった。

2) 検討会には全員が参加したが、開催日によって出席者の人数とメンバーに変化があった。

2.2 調査方法

質問紙調査法を用いた。項目は、①フェイスシートとして派遣校種、配属学年、配属学級、性別、大学生の所属、②検討会への満足度、検討会日程についての評価、検討会開始時期、検討会の時間、使用している連絡記録表についての評価、検討会で意義のあった検討内容であった。

2.3 調査実施日

2012 年 1 月の検討会実施日であった。

2.4 調査用紙の配布回収方法

検討会終了時に質問紙を配布し、その場で同調査用紙への記入を依頼した。その際、学習支援ボランティア学生（以下、ボランティア学生）1 名に封筒を手渡し、そこへ回収してもらった。

3. 結果

3.1 質問紙調査

3.1.1 回収率

回収率は 78.6% であった。

3.1.2 回答内容結果

1) 検討会への満足度

「非常に満足」が 5 名、「ほぼ満足」が 5 名、「どちらでもない」が 1 名であり、満足度は高いと言える。

2) 検討会の日程への満足度

「非常に満足」が 5 名、「ほぼ満足」が 6 名であり、日程についても満足度が高いと言える。

3) 検討会開催時期の希望

2011 年度は大学の後期授業が開始される 10 月から実施した。「活動開始直後から」9 名、「9 月からが良い」が 1 名、「今の時期で良い」が 1 名であった。検討会の実施は、学習支援ボランティア活動開始直後の 5 月からの希望が多いと言える。

4) 検討会の時間

検討会の時間は、大学の授業時間に合わせ、90 分間であった。「今の時間で良い」と回答したのが全員であり、今の状態が良いと言える。

5) 連絡記録表について

連絡記録表についても「今まが良い」という回答が全員であり、今の状態が良いと言える。

6) 検討会の内容について

表 1 は、検討会で得られた内容についての意見とその比率を示したものである。

表 1 検討会の内容 (%)

No	内容について	%
1	子どもへの支援方法が学べた	100
2	発達障害への支援方法が学べた	100
3	子どもの特性が学べた	91
4	発達障害のことが学べた	91
5	特別支援教育について学べた	27
6	担当の先生への接し方が学べた	18
7	学校の仕組みが学べた	18
8	その他	0

検討会の内容については「子どもへの支援方法が学べた」と「発達障害への支援方法が学べた」が 100%, 「発達障害のことが学べた」が 91% であり、それらに役立ったと言える。「担当の先生への接し方が学べた」, 「学校の仕組みが学べた」, 「特別支援教育について学べた」は比率が低く、知ることができなかつたと評価している。

3.2 検討会での検討内容

3.2.1 検討会の実施方法

授業後期期間金曜日の 5 講時（16 時 20 分～17 時 50 分）にボランティア学生と指導教員で実施した。毎回発表者を決め、発表ボランティア学生が予め決めていた様式に書き込み、その内容を参加ボランティア学生と指導教員で話し合った。様式の内容は、セッション回数、日時、講時、学級、教科、支援内容、児童・生徒の反応等、質問・疑問・反応から考えたことであった。

3.2.2 検討会の実施内容

検討会の実施内容は以下の通りである。

検討会に表 2 のレポートを提出したボランティア学生に対して参加ボランティア学生から、1

校時目の国語に関しては「A 君はひらがなが書けるのか」, 「鏡映文字（文字を鏡に映したように左右対称の文字を書くこと）はないのか」, 「（手本）見て書くことはできるのか」などの質問があった。それに対して「ひらがなは書けない」, 「鏡映文字でない」, 「（手本）見て書くことはできないが、（手本）なぞることはできる」, 「自分の名前にある字はわかる」という回答が報告ボランティア学生からあった。また、2 校時目の算数については「『苦手に感じているよう』というのは、どうしてわかったのか」という質問が参加ボランティア学生からあった。報告ボランティア学生は「A 君は『できん』と言っていた」と答えた。

A 君は、数字と物との 1 対 1 対応ができるているのは 2 までであり、それは、まだ完全ではない可能性があること、ひらがなをなぞることはできるが、それを文字として認識している可能性は低く、ひらがなという抽象度の高さはまだ理解できない可能性があることなどを指導教員からコメントした。

また、それらへの対応として、お皿のような入れ物 1 つにおはじきのようなものを 1 つ入れるという作業を繰り返し、徐々にその数を増や

表 2 検討会での検討内容例（小学校）

セッション回数/日付	校時/学級/教科	支援内容（授業内容等）	児童・生徒の反応等	質問・疑問・反応から考えたこと
16回目/ 11月 11 日	1校時/ 小学校 1 年/ 国語	A君への支援 (ひらがなのプリント)	絵に描かれているひらがなを読む。次に、そのひらがなと同じひらがなが書かれているカードを見つけて同じひらがながある部分に糊で貼るというプリントをした。 A君は、最初は「嫌」と言って、プリントを隠そうとした。何と声を掛けようかと考えていると先生が「さあ、しよう」と声を掛けるとやり始めた。 同じひらがなを見つけるのが難しいようで、間違った部分に置くと、「ちょっと形が違うなあ」という言い方しかできなかつた。	A君は、ひらがなを読むのが困難なようで、プリントのひらがなを読むというよりも絵を見て答えていた。 同じひらがなを見つけることも苦手なようで「かき」「かさ」「かい」「かに」を区別することが難しかつた。 区別するときにどのように言葉掛けをして良いかがわからなかつた。
	2校時/ 同/ 算数	A君への支援 (数)	おはじきを先生が言った数だけ並べるということを練習した。 A君は、「1個」「2個」は並べることができたが、それ以上の数は並べることができなかつた。「3個並べてね」と言うと「1, 2, 3, 4, 5, …」とおはじきを並べ続けて「3個」だけ並べることはできなかつた。おはじきを並べながら数を数えているが、おはじきを並べた数と言葉で言った数が合っていないこともあつた。 A君もおはじきを並べることを苦手に感じているようで、最初は嫌がつていった。	おはじきの数と数字の間の対応ができていなかつた。 10 個並べたおはじきを「10」まで順番に数を数えることはできた。 どのような方法や言葉掛けをして教えたら良いのか、わからなかつた。

し、数と物の 1 対 1 対応を経験的に身につけさせるようにするのはどうかと指導教員から提案した。ひらがなについては、まず、実際の物とその名称が一致するかどうかを調べ、それがしつかり定着していなければ、それを繰り返すようにしてはどうか、それができているのであれば、その名称と文字が 1 文字ずつ対応するよう繰り返して練習るのはどうかと指導教員から提案した。

また、A 君は、「嫌」と言って国語のプリントを隠そうとしたり、おはじきを並べたり、数えたりすることを「できん」と嫌がったりしていることから、自分ができないことを認識している可能性があるので、支援する時には、その点への配慮も必要ではないかと指導教員からコメントした。

表 3 のレポートを検討会に提出したボランティア学生に対して支援の概要を指導教員が尋ねた。理科、算数、社会の教科の支援をクラスの

状態を見ながら適宜動いていること、B さんについて当該校の特別支援教育コーディネータから B さんのことを LD (Learning disabilities ; 学習障害) もしくは、知的程度がボーダーレベルではないかという説明を受けているという説明が報告ボランティア学生からあった。B さんとの関係について質問した参加ボランティア学生がいた。それに対して報告ボランティア学生は、1 学期は他の女児の端にいた。2 学期は B さんから避けられていると回答した。その他、10 回目の算数の授業について「『集中している様子でもなかった』というはどういう様子だったのか」、「C 君にどのように対応すれば良かったと考えているのか」、「『初めの頃の反応に戻ってしまった』というるのは具体的にどのようなことになったのか」などという質問が参加ボランティア学生からあった。それらの質問に対して報告ボランティア学生は、「前を向いて着席していた」、「C 君も、もしかしたら『先生わからん』

表 3 検討会での検討内容例（小学校）

セッション回数/日付	校時/学級/教科	支援内容（授業内容等）	児童・生徒の反応等	質問・疑問・反応から考えたこと
10回目/ 10月5日	3校時/ 小学校5年/ 算数	Bさんへの支援 (素数を見つける 公約数) 机間巡視	今日のBさんは、ごそごそと動くわけではないが、集中している様子でもなかった。一斉指導が伝わりづらい部分があるので、隣に行って視覚的に（先生の）指示を伝え直した。 表から数字を消し、素数を見つけるという作業だったのだが、規則が次々に変わっていくため、難しいようで間違いを指摘する回数が多くなったためか、最後の方は投げやりになってしまった。 途中、C君が「Bさんの表汚いなあ」と言ってきたが、Bさんは何も言わなかつた。 その課題の後は、（Bさんの）近くに行っても手元を見せてくれなかつた。	Bさんは掛け算・割り算が完璧には習得できていないようだった。 (Bさんの) やる気を損なわずに支援する方法はなかったのだろうか。 1つの課題への時間が長かったこともあり、嫌になつたのか。 C君に対して「そんなこと言つたらだめでしょ？ 前、向いとかないと」と言つてしまつたが、もっと二人に配慮した言葉がなかつたのか。 Bさんは、（手元を隠すという）初めの頃の反応に戻ってしまった。
11回目/ 11月12日	3校時/ 小学校5年/ 算数	Bさんへの支援 (約分) 机間巡視	約分の概念が、まだ理解できていないようだった。近くに行った時には4問目の途中だったのだが、全て間違っていた。しかし、1からやり直しをさせて、やる気を損ねてはならないと思い、4問目から直していくと本人が上の間違いに気付いたようで自分から消して直し始めた。 今日は1問1問が短かったためか、進んで問題を行っていた。しかし、先生から「○箇、正解の人」という呼びかけが2回あったが、2回共、どれにも手を挙げなかつた。	今日は手元を隠すことなく、授業にも前向きに取り組めていた。間違いに自分で気づいてくれたのは嬉しかつた。 しかし、先生からの呼び掛けに対して手を挙げなかつたのが気になつた。ボランティア学生が関与して正解した問題であったため、Bさんに「自分が正解した」という実感がなかつたのだろうか。そうなると達成感は味わえていないのではないか。
	給食/ 小学校3年	配膳の手伝い 座らない子への声掛け	いつもに増して騒がしい。 Dさんが昼休みの鬼ごっこについて皆に呼び掛けたのがきっかけで歩き出す子が続出する。先生も最後には怒鳴り散らすようになり、さらに状況は悪化し、「ごちそうさま」をするまでに15分掛かつた。	先生が注意をしている時は、ボランティア学生も働きかけをしているのだが、先生が注意するのをやめ、前に立って待っている時はどうすれば良いか悩んだ。 今思うとボランティア学生自身も動かない方が良かったのかとも思うが、時々働きかけてしまつた。

と言いたかったのではなかったのか。C 君も表を見て欲しかったのではないかと考えている」、「Bさんはノートを隠し続けた」と回答した。

11回目の算数の授業に関して、「『間違いに自分で気づいてくれたのは嬉しかった』とあるが、あなたは何か言葉掛けをしたのか」と質問した参加ボランティア学生に対して、報告ボランティア学生は「何も声掛けをしていない」と回答した。また、「先生の問い合わせに対して Bさんが手を挙げなかつたのは、Bさんが周りを気にしていたのではないか」とコメントした参加ボランティア学生がいた。

Bさんに対する報告ボランティア学生の疑問に対して指導教員は以下のようにコメントした。掛け算や割り算が完全に習得できていなければ、素数を見つけたり、公約数を考えたりすることは難しいこと、「やる気を損なわない」ためには、Bさんの性格も関係するが、一般的にできたところを褒める支援方法を取る方がやる気を起こさせること、「課題への時間が長い」ことについては、Bさんの課題への集中時間を査定し、その時間内で1つの課題ができるようにしてはどうだろうか、Bさんと C君への言葉掛けについては、「C君は Bさんの表が汚いと思うのだね。Bさんはそう言われたらどう思うのかなあ」など両者の思いを言葉にして表わしてみるような支援はどうだろうかと指導教員から指導した。

給食指導のクラスについて参加ボランティア学生から普段の状態や担任の行動についての質問があった。それに対して支援をしているクラスには、授業時間にも支援に入っていること、担任の先生が毎時間お説教をするが、その時も児童の立ち歩きがあり、学級崩壊状態であること、そのため、学年の先生たちで見守り指導をしていることが報告ボランティア学生から報告された。また、「先生が最後に怒鳴り散らすように」という部分をもう少し具体的に説明して欲しいという意見が参加ボランティア学生から出た。報告ボランティア学生は、歩き出す児童が続出し、その児童を教室外まで追いかけて行ったが、状況が収束できなかつたので、最後は

教室の前に先生がじっと立ち、児童が席に着くのを待つ感じであったと詳細な説明を行つた。さらに「あなたが『時々働きかけてしまった』とは、どのようにしたのか」という質問が参加ボランティア学生からあつた。報告ボランティア学生は、「座りよ」と言つてしまつたと回答した。これに対して、担任の先生のやり方がクラスの児童に合っているのかどうかすぐには判断できないが、この場合は担任の先生の意図を汲み取り、それに合わせた行動を取る方が児童は混乱しないかもしれないと思うがどうだろかと指導教員からコメントした。

表4のレポートを検討会で報告したボランティア学生は報告したクラスについて補足説明を行つた。このクラスは、別室登校クラスであること、通常のクラスで1校時に当たる時間帯がこのクラスでは2校時と呼ばれていること、したがつて、表4の5校時というのは給食前であること、このクラスの授業時間は8時45分から13時までであること、授業時間によって担当の先生が決まつてること、一斉授業ではなく、個別に好きなことをしたり、配布プリントをしたりしていること、このクラスに登録している人数は9人で、そのうちの6~7名が毎日出席していることなどである。その上でレポートの説明が行われた。この内容に対して参加ボランティア学生は E君を先生はなぜ起こさないのか、起きている時は何をしているのかと質問した。E君は家庭の事情で夜、寝ていないことを先生たちは知つてゐるので、無理に起こしたりしないこと、E君にはこうしてくださいというような指示はないこと、起きている時は漢字の書き取りをしているが、テストには答えられないこと、積極的に自主学習はしていないと報告ボランティア学生は回答した。

Fさんと Gさんがこのクラスにいる理由を参加ボランティア学生が質問したところ、Fさんは1年の時にクラスの生徒ともめたこと、Gさんは1年の時にクラスで何かがあつたのではないかと説明があつたという報告が報告ボランティア学生からあつた。加えて、ふたりは一緒にいて、仲が良く、よく話していると言つた報告

表 4 検討会での検討内容例（中学校）

セッション回数/日付	校時/学級/教科	支援内容（授業内容等）	児童・生徒の反応等	質問・疑問・反応から考えたこと
○回目/ 10月17日	3校時/ 中学校2年/	E君への支援	授業中に寝ていることが多いE君。 2校時は起きていたが、休み時間に自分の席で寝ていた。 3校時が始まった時にE君が顔を上げたので「E君おはよう。授業始まつるよ」と声をかけた。その時は反応があつたが、すぐに寝てしまった。	普段、起きている時は声をかけるが、完全に寝ている時は先生方も無理に起こすことはしない。本人はその時間「起きていました」と言っていた。もう少し粘って声掛けをした方が良かったのだろうか。
	5校時/ 中学校2年/	Fさん、Gさんへの支援	学年の先生が連絡を持って来られた時、来週の学力テストの連絡が遅いと言つてFさんが怒り出した。 先生によると、テストの日程や範囲は先週からわかつっていたらしい。後でわかつたことだが、クラスの生徒には先週連絡されていた。担任の先生は先週にもよく教室にFさんの顔を見に来ていたが、テストのこととは伝えてくれなかつたとのこと。以前にも同じようなことがあり、担任の先生に早く連絡して欲しいと伝えたのに、今回も連絡が遅かったので腹が立った様子。 担任の先生がお休みされていたため、Fさんが教室で愚痴を言つてると隣の席のGさんが「ここでそんなん言っても仕方ないやん」などと話しかけていた。Fさんは教室で泣き出てしまつた。 連絡のことについては、後でFさんが学年の先生や教頭先生に伝えていた。	Fさんによると母親がテストに厳しく、担任の先生からの連絡が遅かったと言つても「クラスにいないのだから仕方ない」というような反応が返ってくるらしい。Fさんは自分なりに勉強を頑張っているし、高校進学のためにも学力テストは重要なので、クラスの生徒と同じように連絡をもらえないのは、おかしいと感じている。 Gさんの発言にはやや棘があった。私が「Gさんが言つてることも正しいけれど、今Fさんは腹が立つてゐるんよ」、「Fさんもつらいんやからそんなふうに言わんといつてあげて」と声をかけたが、Fさんが泣き出してからも淡々とGさんは同じ発言を繰り返していた。 FさんとGさんを離した方が良かったのだろうか。

もあった。

「『Gさんの発言にやや棘があつた』ということについてもう少し説明をしてほしい」との質問が参加ボランティア学生からあつた。Gさんは口調が厳しい上に内容がストレートであること、この時も「今からできるテスト勉強したら」という発言もあり、そのような発言をやめないこと、Fさんが泣き出してもGさんは表情を変えず、言い続けることなどの報告が報告ボランティア学生からあつた。

これらのやりとりの後、指導教員は次のようにコメントした。E君の学習態度には家庭環境の影響が大きいように感じること、また、報告ボランティア学生からの「もう少し粘って声掛けをした方が良かったのか」という問い合わせについては、E君の授業態度については先生方も無理に起こしてはいないので、先生方と異なる行動は取らない方が良いのではないだろうか、もし、何か声を掛けるのであれば、E君が「起きていました」と言った時に「起きていたのですね」などと声を掛けるのはどうだろうかと指導教員からコメントした。

また、Fさんは母親がテストに厳しいという

要因があるもののテストへのこだわりが強いようを感じること、そして、Gさんは仲が良いFさんが泣いていても、表情を変えず、Fさんがテストの日程や範囲の連絡がないことに不安となり、怒りを感じていることに共感できないことなどからFさんとGさんは、発達障害の可能性を視野に入れて対応するのが良いのではないか、Fさんは自分の特性に対しての対処行動を取れているので、そのことについての支援は不要ではないだろうかと指導教員からコメントした。

表5のレポートを検討会で報告したボランティア学生に対して参加ボランティア学生は、Hさん、Iさん、J君について、それぞれの学習能力を含め、もう少し詳しく説明をしてほしいと依頼をした。Hさんについて、所属しているクラスは古典の徒然草のプリントをしていること、Hさんは周りがしていることを気にせず、黙々と課題をしていること、教科担当の先生から報告ボランティア学生に「ボランティア学生がいるから集中している」と言わされたこと、「どれにする（多肢選択）」と尋ねると答えられないが、二者択一だと答えられること、簡単な動

表 5 検討会での検討内容例（中学校）

セッション回数/日付	校時/学級/教科	支援内容（授業内容等）	児童・生徒の反応等	質問・疑問・反応から考えたこと
△回目/ 12月12日	2校時/ 中学校2年/ 国語	Hさんへの支援 (文字の書き取り)	Hさんはノートの書きとりもままならないで、授業中はひらがなの書き取りをやっている。	周りを気にせず黙々とやってくれるので次にやるところ、どう出来たかを見るだけなので楽なのだが、何かこちらから理解を少しでも深められるようなアプローチの仕方がないのか、また、必要なのかを考えている。
	3校時 中学校2年/ 数学	Iさんへの支援 (多角形の外角の和)	Iさんはノートを取るのが遅いと言っていたが、この日も周りに比べるとノートを取るのが遅かった。そのためか途中でノートを取るのをやめてしまい、ボーっとしていたので板書の要点だけでも書くように促した。その後、要点は書いてくれたが、その後の練習問題を解こうとはしてくれなかった。	Iさんのクラスに入ったのは三回目だが、一、二回目と比べると明らかに授業について行けていない印象を受けた。 これから、このクラスにまた入るかはわからない。 関わりが薄く、どうコミュニケーションを取って良いかがわからない。
	4校時 保健室/ 理科	J君への支援 (理科の復習 植物の世界)	今回初めて顔を合わせた。学習では特に問題なく、一緒に理科のプリントをやった。	前期は不登校であまり学校に来なかったが、最近は保健室登校をするようになった。そのため、これから関わっていく機会が増えるかもしれない。そのためどういうスタンスで関わっていけば良いのだろうか。 現在は何となくお互いに堅い家庭教師のような関係だと思っている。

物名はわかること、経験不足も関係しているのではないかということが報告ボランティア学生から述べられた。加えて、Iさんは、会ったのが3回なのでその範囲であることを前提として、例えば、掛け算と足し算のある計算は規則を理解できていず、前から順番に計算して行くので答えを間違う、「これだけ書こうよ」と指示するとそこだけは書けることなどから学習の遅れがあると思うこと、友達はいるように思うこと、Iさんに大学生がべったりくっつくとIさんが嫌がるのではないかと先生から言われていること、教えるがその内容が定着せず、わかっていないこと、Iさんに報告ボランティア学生が近づくと嫌そうで、人見知りがあるようだが、「向こうへ行け」とは言わないことなども報告ボランティア学生から語られた。さらに、報告ボランティア学生がJ君とプリントの解答をしている時、「わからないところは飛ばしていいよ」と言うと「できました」とJ君が解答してきたので、できているところは「ここはよくできている」と伝えたこと、普通の難しさの問題ができていなかつたので解説すると聞いていたこと、簡単な問題を間違っていたので解説すると「そんなんわかってる」と怒った様子で答えること、記述式問題は解答できないこと、冗談は通じないこと、小学校で何らかの傷つき体験が

あること、他者と関わることは嫌ではないが、自分から求めることはないこと、先生と話す時も淡々と機械的であること、表情の変化に乏しいことなどが報告ボランティア学生から述べられた。

指導教員は報告ボランティア学生に3人のことと質問し、次のようなコメントを行った。Hさんのことについて、抽象語の意味は理解しているのか、例えば、「疲れた」とか「まぶしい」は意味がわかるのか、ひらがなの書き取りをしていて難易度は高くなっているのかと指導教員が尋ねたところ、報告ボランティア学生から次の回答があった。「疲れた」や「まぶしい」はわかっているが、教室にいて太陽光がまぶしい時に「まぶしい」と言わないこと、「カーテン閉めようか」と言うと「閉めて」ということ、ひらがなの定着はむずかしいということであった。そこで、Hさんは言葉の辞書的意味は理解していると思われるが、社会的文脈での使用は難しいようなこと、また、知識の定着が難しいようなので同じ内容でも毎回新しいことを学んでいるような印象があるようなこと、そのような状況で中学校の教室に座っていることを評価し、教室で楽しい体験をすることを目標のするのが良いのではないかと指導教員からコメントした。次にIさんへの印象をいろいろと感じて

いるが、まず第 1 に信頼関係作りを目指すことだと思うこと、そのためには I さんが 1 つでもうまくできただけがあれば、褒めるようにするのが良いのではないだろうかと指導教員からコメントした。最後に J 君については、発達障害の可能性が考えられること、人間関係に過敏な部分もあるので誠実に接することがまず必要だと思うと指導教員からコメントした。

4. 考察

特別支援教育への支援事業の一環として実施している大学生による学習支援ボランティア派遣事業は 8 年目を迎え、徳島県や徳島市においてほぼ定着した活動である。その活動における課題として大学生に対する指導体制、大学生と派遣校との連絡体制がある。連絡体制の一助として連絡記録表がある。しかし、その活用は派遣校によって差がある^{2,3)}。連絡記録表の活用や派遣校からの指導が不十分だと大学生は、自分の支援活動がそのままで良いのか、改善する方が良いのか、改善するのであればどのようにすれば良いのかについての指針が得られず不安になる。また、大学生の支援活動が児童生徒にとって不適切であれば、当該児童生徒への支援とは言えなくなる。

そこで、学内において本学のボランティア学生を中心に学習支援ボランティア活動における児童生徒の活動、それらに対するボランティア学生の支援、それらの支援活動から考えたこと、生じた疑問などについて検討する会を定期的に開催した。

検討会に参加したボランティア学生 14 名中 11 名を対象として、検討会についての意識調査を実施した結果、検討会への満足度は高く、検討会を通して子どもへの支援方法、発達障害への支援方法と発達障害のことが学べたと回答した。

検討会での報告内容で、ボランティア学生は授業での児童生徒の行動、ボランティア学生自身の児童生徒への関わりを客観的に捉え、クラスの中での児童生徒の状況を査定し、そこでのボランティア学生自身の支援を評価し、検討会

以降の具体的な支援を報告者である指導教員のコメントをヒントに考えていた。また、検討会に参加していたボランティア学生達も、報告ボランティア学生のレポートを基に話し合うことで自分自身の派遣校での支援を振り返る機会になった。

5. まとめと今後の課題

小学校や中学校に大学生を学習支援ボランティアとして派遣する学習支援ボランティア派遣事業において課題となっているボランティア学生に対する指導体制、ボランティア学生と派遣校との連絡体制を支援するために学内でボランティア活動検討会を実施したので報告した。

ボランティアの語源が、「自由意思」を意味するラテン語のボランタス (Voluntas) という言葉であるといわれているようにボランティア活動は自発的な意思に基づいて他人や社会に貢献する行為とされている⁵⁾。ボランティア活動は、活動を行う者にとっては自己実現や社会貢献への意欲を満たすものであり、受ける側にとっては公的サービスによっては満たすことができない多様な生活課題を充足してくれるものとなる。また、社会全体にとっても、人々の新たな支え合い（共助）の理念に支えられた厚みのある福祉を実現することにつながるとされている⁵⁾。

報告しているようなボランティア活動は、日本教育大学協会に所属している教員養成系の大学では、単位認定している大学もある⁶⁾。本学においては、純粋なボランティア活動として位置づけられている。参加している大学生は、将来教員や臨床心理士になることを希望している。そのような大学生にとって本ボランティア活動は自己実現や社会貢献への意欲を満たすものであり、大学生自身にとって自分の活動が学校教育現場に役立っているという社会貢献への意欲を満たす活動であると共に、大学生自身の自己実現を満たす活動であると言える。

今後も本活動を継続していくに当たり、教育委員会と連携し、現在教育委員会が契約しているボランティア保険に加え、さらに安全対策、危機管理、指導体制などの充実を図り、大学生の自己実

現の一助となる活動になるように検討を重ねたい。

参考文献

- 1) 山本真由美・瀬部あゆみ・島 治伸：学生ボランティアに対する派遣校教師の評価, 徳島大学総合科学部人間科学研究, 17, 109-128, 2009.
- 2) 山本真由美・津島知彦: 学習支援ボランティアの派遣校に対する評価, 徳島大学総合科学部人間科学研究, 18, 87-103, 2010.
- 3) 山本真由美: 特別支援教育における学習支援ボランティア学生と派遣校教師との連絡体制について——特別支援教育コーディネータの立場から, 大学教育ジャーナル, 8, 113-121, 2011.
- 4) 渡部太郎・金山好美・無藤 崇: 通常学級の担任教師と教員補助者のコミュニケーション・カードの改善による担任教師からのコメントの増大, 行動分析学研究, 22, 39-48, 2008.
- 5) 厚生労働省, これからの地域福祉のあり方にに関する研究会, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7a.html>, (2012.12.30) .
- 6) 日本教育大学協会編, 教育支援人材育成ハンドブック, 朱鷺書房, 2010.